

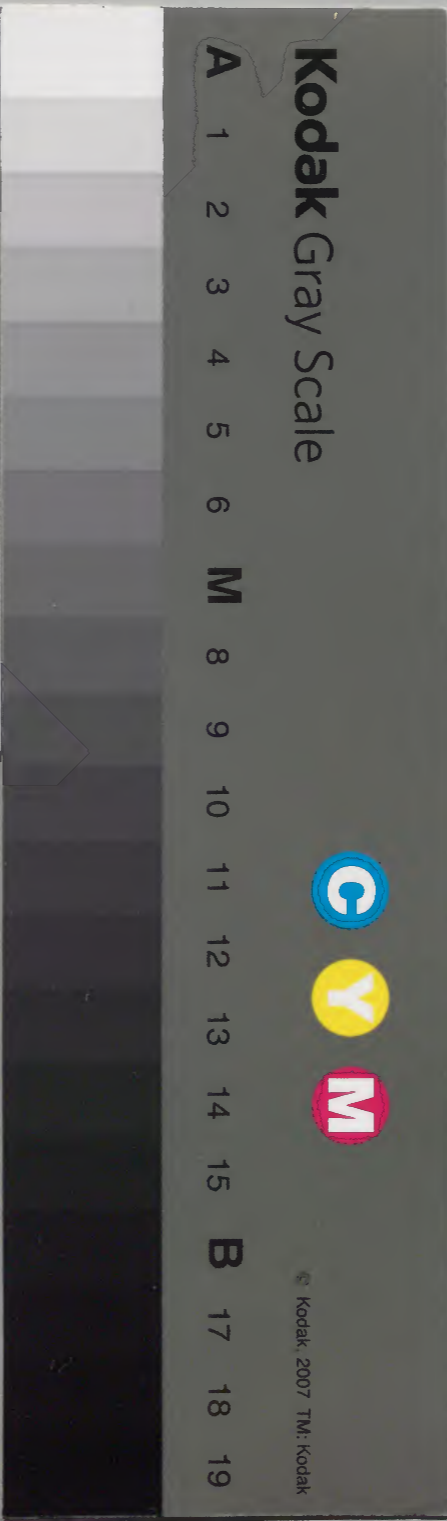
# 安政見聞誌

下

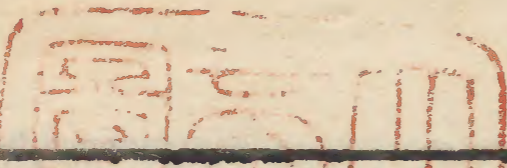
和書門			
二八〇八	八	七	九
號	函	架	册
類	類	類	類

内閣文庫	
二八〇八	和書
八	類
三	册
二	函
二	架

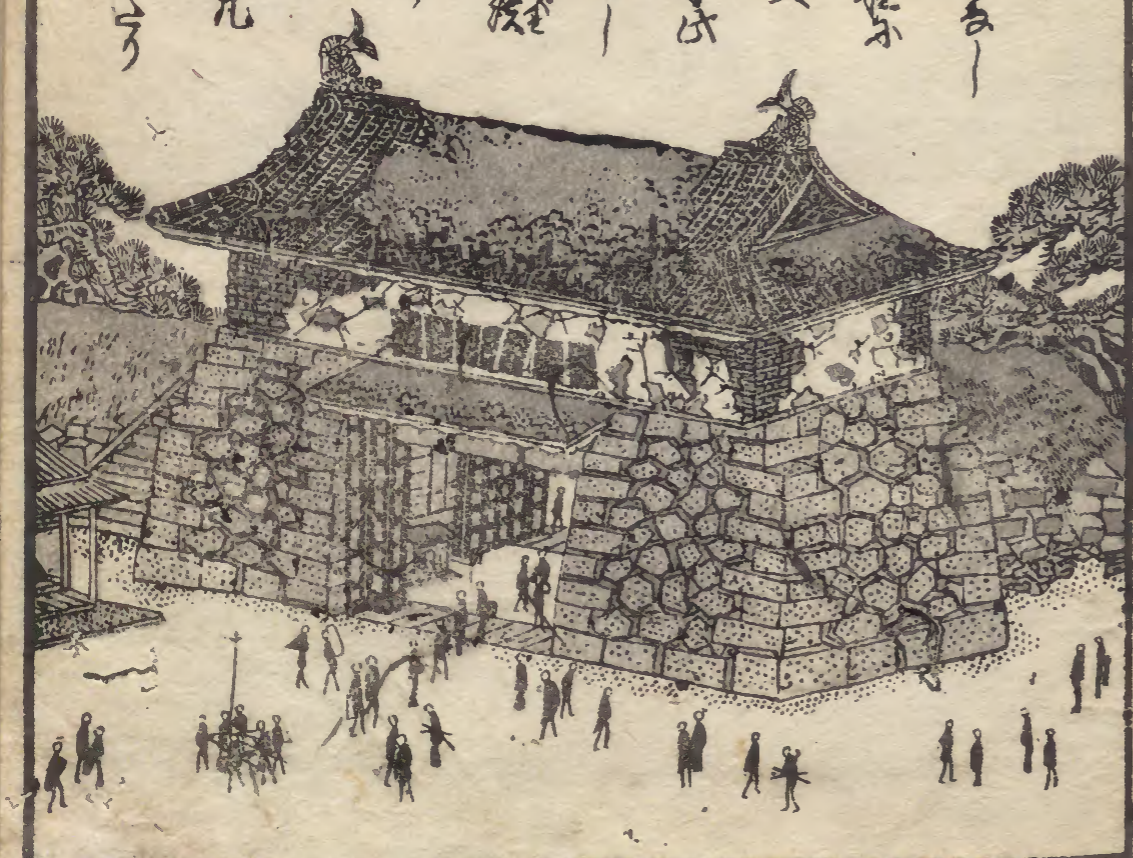
内閣文庫	
番號	和 28088
冊數	3 ( 3 )
函號	166 416



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



江戸御城の見附敷三年六月廿五日  
 江戸御城の地畠を以て何事も取換せざる由  
 御由一四谷町の橋へ橋より若狭  
 舟と丸船ふりやうたるおと一里又  
 御園寺と城門のたてておつた御子  
 おとくまの御子と御子の強と知  
 改小六子馬場馬場御子門の御子  
 其形おれ取置せし御子と御子  
 御子と御子と御子と御子  
 有と御子の御子の御子の御子  
 寺入御子の御子の御子の御子



江戸御城見附敷三年六月廿五日



○今宵の地震にて破損の煙草  
 の煙草を採取する葉井丁の煙草  
 の煙草を採取する葉井丁の煙草  
 三番丁門前丁二日の夜に  
 の二家の大通へ倒れあまたの  
 木尾ふて山のおどろけり  
 火災のあつり各かたの煙草  
 ちんまより煙草の下ふり  
 怪我せし人もあり  
 煙草の下より煙草を突て  
 煙草を何て取りしは  
 境内のちり破損の去るは



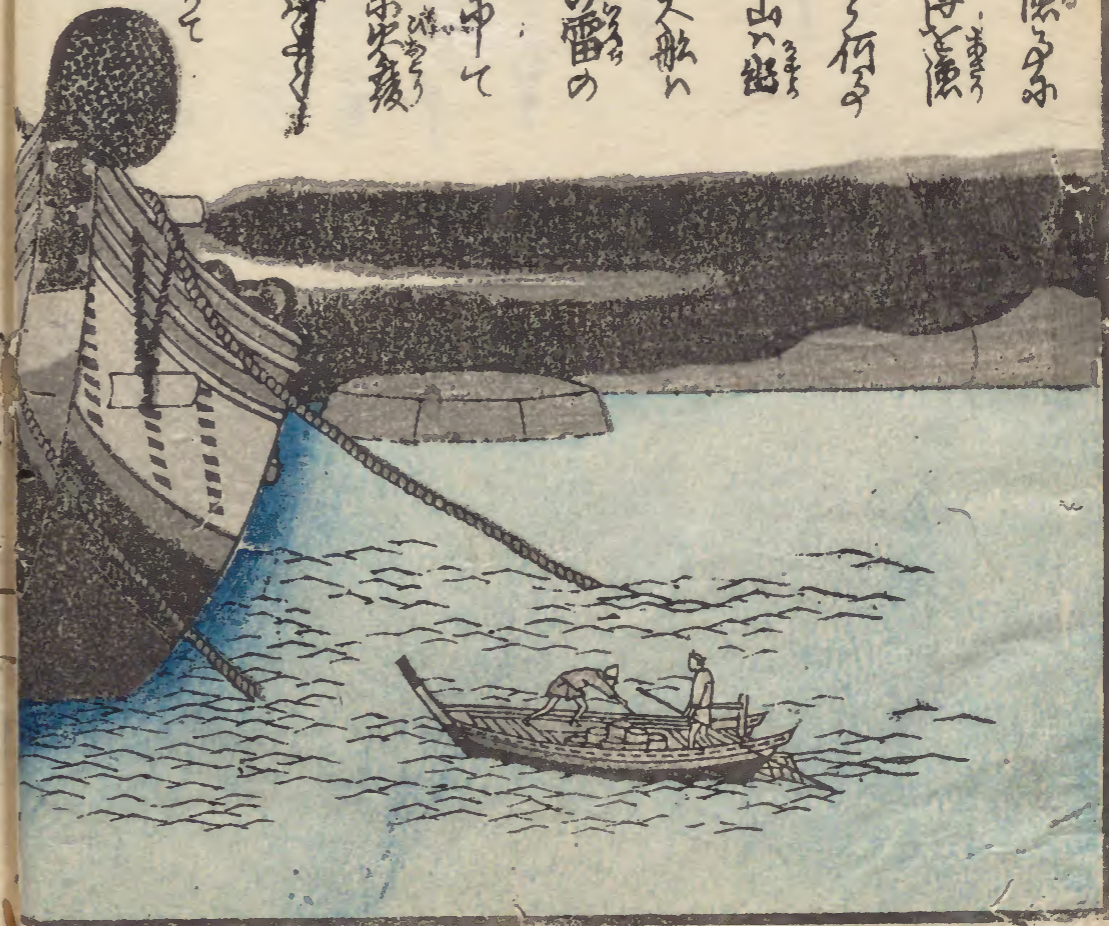
至是に南方七都丁戸前中の  
 丁のあつり初揺るたれ破損の  
 煙草におつ総て火災の多し  
 他列しては出取最強  
 五つて是れあつり初揺るたれ  
 今夜あつり合さるのあつり

神威の民  
 初かき国民  
 神一カ  
 くらひの  
 住り候





早々大島渡本あり一夜申魚と漁るふ  
 妙と傳う十月二日の夜船の干得と漁  
 仍も田町のま中人の噂く繕りあつて何ぞ  
 ぞと考ふを対してるふ南島の山に絶  
 ちてゆくといふ又島にばあつ居大船の  
 奴三又中空へとつとるる船百の雷の  
 東と震初然とて海にや船中にて  
 物寂り限り一程あり江戸の平々ゆき後  
 悪風の時ありぬ三王家の要危中や  
 徳具を携は其中心に江戸へ返りあつて  
 且物さしつる序ふ家小あつと



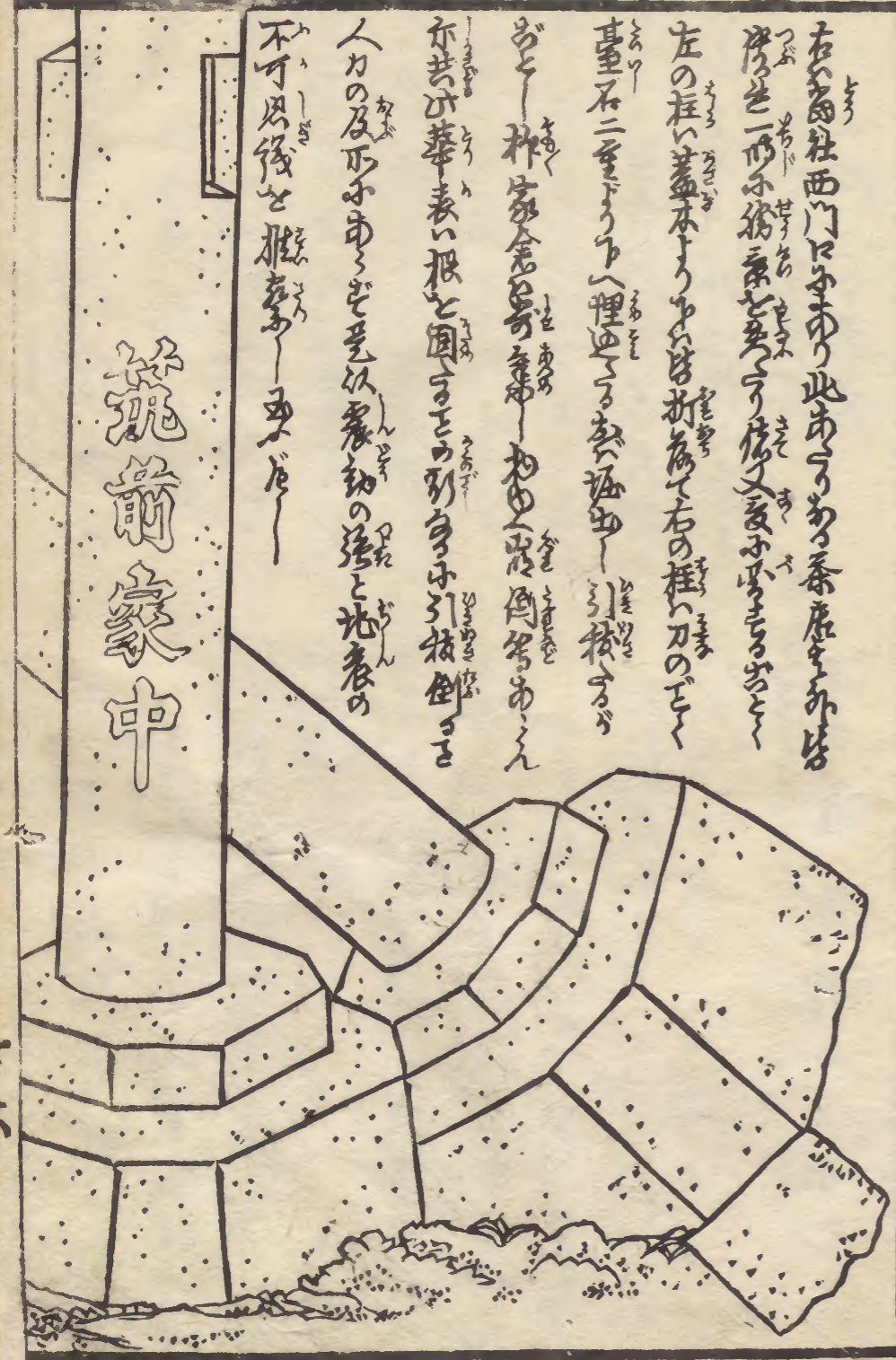
△戸が小泉氏上総の要するて系居る右大池表小て江戸表大火の傳と  
 きり申すを於二道と名づる傳は先八傳と東比十月四日夜丑刻之小村外  
 て年の程廿日又才女二十才の児と梅花身小引合しつてちんとして是を  
 又んとする小其容儀くづる女を其其の夫のそくを定ふて止る一又  
 又丁斗する小小④不付するちんと思し一若夫も人出する小泉と引合小児あり  
 連ねる夫とをそのの女とのと傳は梅はま今に遊遊するの  
 叶へるむを返るんとて一途一返るゆへ小泉を放とす小泉村左丁長  
 妻由女といふ老地居の傳は夜に二才の小児と引合とあるも繪丸中にて被る  
 人なくと殺小まる不復んと其乳とま共小任を父の痛小傳と示す夜  
 其児と取ゆ一乳と十分小のませ家内何処とままると居居てあへ余りあは  
 成ると傳うぬ因之小泉の傳は女の傳う傳う若せちの母の上總中て戦子の  
 坐免小ひるも亦万不て乳と其母とて又連ねるあんと云小泉と是ありたり

龜戸天神社内西口華表圖

二重の磐石より下方四尺寸半あり  
 左の左柱のまどく半埋まあり

右の西社西門口あり此ありある系居るあは  
 傳は二の小橋系と名づる傳は又あふまるとあり  
 左の柱は蓋本より折れて右の柱は刀のどく  
 其石二重より下へ埋ゆる磐石也一引接する  
 あり一柱は倉倉寄系一あり一柱は倒れありん  
 亦其の華表根と圓するものあり引接する  
 人力の及りあふるも是は表初の強と地表の  
 不可思後と推する一あり

花前家中



△電氣社下敷小池色徳養上中下登安被物悉焼し  
 △大徳寺院大破損△万来山寺松島因下△電氣社大破  
 損あり△三縁山堀寺徳房才大破損最不多し△切寺大  
 成安屋安大破畧△因下全地院大破  
 ④新橋外南方徳養大破畧△中代地町大破損最不多  
 因南方兼房町寺丁中焼寺先と疑ふ中り小徳寺家あり南  
 方松平寺於安あり之家徳寺あり同不伏見丁外丁久保丁  
 あり丁長左衛門丁寺大破損下為家多し  
 △山下河門外小教小登之徳形人

- 一 尚百残半費文 新島丁也丁目
- 一 小残二十費文 東寺町徳信
- 一 尺残 七筋々 尾陣 六右楽門
- 一 残二百文々々 本橋丁五丁目上納地

依本道左所稱徳安  
 下徳寺に於て依村 百姓  
 七所去來

△三田色赤形橋向ふ有馬屋水長屋水長宮素指門の隣  
 より東の方へ百留有餘揺屋あり△藤久根表お見破損  
 其外以也成安屋安大破損△徳坂東為大破損あり  
 △寺町最不多し  
 △樹木長大破損最不少し△いさらと大破損△二本板最不少  
 △池上本門寺大伽藍悉く無異門前石垣破損あり  
 △令松橋南方本芝寺あり破損ありとも最不少し  
 △田町寺大破損ありとも最不少し△本町寺梅小町南河  
 小和川伊和屋と云徳養屋一形法を寺外大破損  
 △芝下形殘あり大破損ありとも最不少し







焼籠を修繕し、  
 大被褥を西へ、  
 △青丁堅接丁多く傷むに被換為修繕あり  
 廻板指しを以ての外被換為西あり

④小門丁一帯の内一帯系有本安老後換為西武治年換内被換河換  
 焼籠を修繕し、  
 月西中申御丁場田中換中ける△此換年の分一帯山方換為葉法換  
 長谷川新井とて此日西内者換向南田中換に松平を後換向と指原悦  
 後辺とて助一と後邊と一と称す備未焼又田換あり△此換年申井雲澤に  
 八尋法衣舎之趣伏舎久保松植と申ける日西向側依田未換に神城の焼  
 川勇我を長吉本本安老見松平川内小林佐長と申ける△日西東神保小治  
 みく間下長飯と傳荒井と申す也と申ける

④小石川内月松平後河換焼籠日西組中死考如表之系後辺冬冬と焼籠内本間  
 年去湯大表勇之席本月高家中條中務小本と申未焼是川中焼籠止る  
 △後河修繕に被換五号内備未焼  
 △筋遠は内村松丁若井丁九軒丁若橋丁柳原那代中死橋本丁并考  
 指原居丁も内火被換為西あり

- 一 薩摩藩 百五十俵 元徳十俵 未入 未入 末之席
- 一 金貳百貳拾 徳正へ移り 徳和同家 齊人 未入 林田銀平 集
- 一 金貳百貳拾 徳正へ移り 徳和同家 齊人 未入 元徳町子目 岡崎屋 若吉清
- 一 金貳百貳拾 徳正へ移り 徳和同家 齊人 未入 林田銀平 死守常 長之常
- 一 金貳百貳拾 徳正へ移り 徳和同家 齊人 未入 林田銀平 山崎清三郎
- 一 金貳百貳拾 徳正へ移り 徳和同家 齊人 未入 大徳町丁 山崎清三郎
- 一 金貳百貳拾 徳正へ移り 徳和同家 齊人 未入 大徳町丁 山崎清三郎

西少一△同前方以雁河岩稻為始濱丁各谷川丁日少△人形丁城丁

青屋丁林本丁町之被換為西多一△小綱丁堀江丁小舟丁辺安年燒焚

物之由新家少人為西少一△小田系丁池田丁江平橋色被換の古為西少一

△日本橋小方富丁十将系合川橋之文被換の古為西多一△友登下濱河丁

教考屋丁小橋倉海岸上の内町之被換為西多一△日西方考鹽橋内城の被

文被換堀井町の換小宮系系換之中に被換夏目たを換被換△龍口南角

傳奏屋為細川換兵被換内秋元換松平傳豆換之被換西多一△山田西多長

屋渡を介被換△日南方松平舟被換水田園防換城後換と抄換河抄換上

屋為河是町被換為西多一

△大名小路町之被換為西多一△教考屋堀内永井堂の換本多中橋換中の

松平右系換去井大被換之被換之元大長也一

△八代河津岸定之濱中石林之長被換夏組の換と燒日西園別換中を燒

と道ゆく止る竜口角河の作幣換本多方為西多一

△大被換堀内町多一松平舟被換内最化修換かける

△和田倉町の月松平紀後換日向守に日西少一△長青西少一の松平傳換

換上屋為之被換

△大倉少堀井之難繼換日向金長吉川出烟換燒△一ッ橋少の内竹橋

少の清少少の内安少の内未被換あは是古為西少一

△日西方代者丁之被換為西多一

△半飛少の内大被換

右之介は有内町之武家青院喜社町家老方と町之相代堀少の少の後

篇小野多一



明暦三兩年

正月十九日江谷火

寺之焼亡十万人を依之本所小

熟宗山毎毎寺回向院を建立在て

右追福を修せしめ百の是を莫大の思ひて

今後の強札の右の高よりありて

何れに其の事とせしめ

諸宗の寺院幾千あり其の中を加へ

一寺の五人宛集りて其の余と云ふ

是の宜あはせりて其の考へ

突も明唐より通ふべきを

初て悉くありて其の考へ

幾共なく其の考へ

香花院小送る客をんを其の考へ

他邦の人は是を其の考へ

其の考への相とせしめ

其の考への其の考へ

其の考への其の考へ



武府内火災と脱きん岩小住居等まで

海軍家及び古流遠とあそび金銀の多きもの

此北限り此小島よりあし物中倉の貯蔵

あつた荒布橋より四方とる小は下より倉の敷と

るる所い又此所より物小建家の被接い取小

止るべき共震出程あり土の敷札せし侍り

實小秋息小倉をりり勿論古流小下り安侍

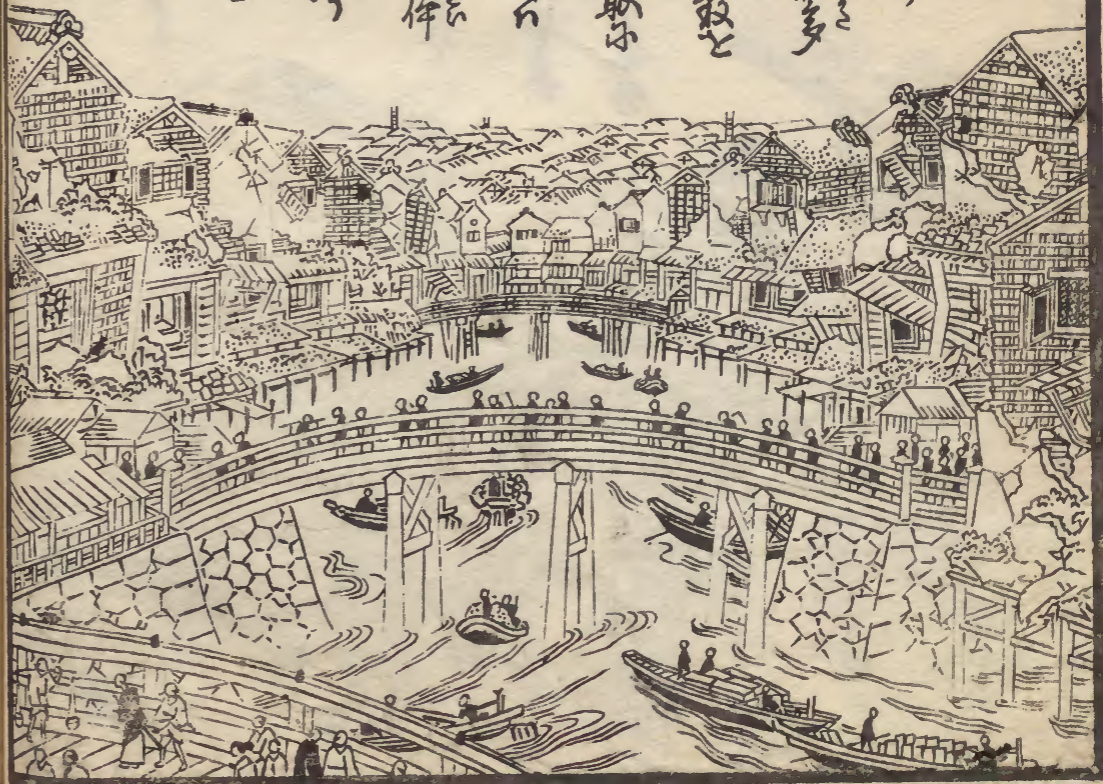
あつたやとこの百物侍り又物りりまきば今

若小あつたや一化境を玉の小あつたや

初示小長衣を六つせん火災あつたや

又侍候といふべし

一書者  
昔編年



△折をた青のりの伝書小物といふも高代の老人物言ふあつたりのは

まづ二年末のりの服系あつたりのあつたりの人疑ふもあつたりの人疑ふ

いふもあつたりの衣の粗とあつたりの文政十二家年五月そそ報を利始り

○天保之辰年二月武家令を利始り同六年七月百文錢を利始り

○同七年徳忌不作三月百文利始り八月飢死りの花多し是より

前七十一年以来天明之年より百文利始り同七年利始り同七年利始り

を付序より伝書小物といふも高代の老人物言ふあつたりのは

稲妻阿武松にて角力い入大徳昌又芝居の中村飲る雨の衣掛

あつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたや

あつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたや

あつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたや

あつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたやあつたや







△又滝原親世が雷津門の本縁をえんは津を地表と知るはふ遠から  
その津判をくは附ふ別商のう被如不強紙あり全く本縁所産の事  
弘明をいへりうと宮と示して虚煩を止めるとはく物事とも本縁  
り此の津をありて粗は地表と知らるる本所産の爲ふ弘明をいへり  
入るとかりて述らうとせば是れ由まき一考事あり

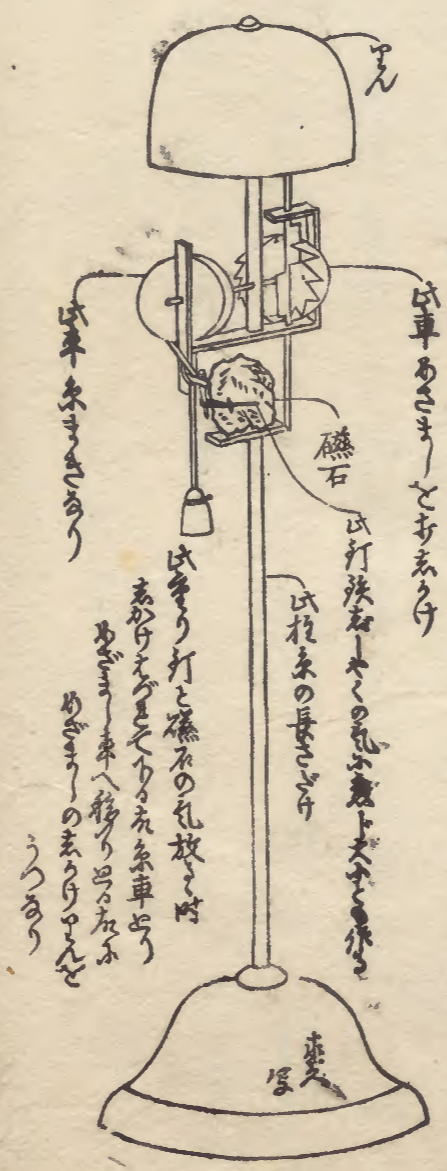
△同本奉書の裏の方不雅と初めらうる事ありねと本る事足ら  
けらうけるは日徳らうるはは流ふはらうと是れ親書の事あり  
らして此のひしふ難ひうと本所産の事あり一考の事あり  
周ふのふ性古宝永四年二月大不雅とまらう宝永山といふの  
出来らうとはく中附の事あり彼は焼くまらうて後不之流るの  
社前ふある二足の木る一足は尺長石の儀と云ふ人々く入  
倉怪しき事ありらうと独りては凡そ退く事ありと云ふ

以津の友らうり世ひまらうて中やうの山焼の後流るの社前の木る  
は之ぎらうと物ふは方之徳明社へ誰人の持来るや本る一足あり  
あり彼是人と云ふふ納めらうといふ若う養やそ方の本る不在  
らぎやと知れせふらうて物事お遠るさかたおゆり又流るの事  
ふ是れ不何附の事ふやら之徳明社の社前ふゆり在ると云ん是れ  
依て津不ある人と云ふ由て入所へ今於之徳の津前ふその  
本るを修むるは修産の料も寄付ありと是もての焼扱と  
まらば後其の本るも又不名産ありともいひ強し

△  
物ふ彼の二日の秋ある時以とや彼石ふ吸つけるる古灯古燈  
そ外族も悉く為らうと云ん年まらうるより大まふ疑ふこと加強ふ  
は石を賣んといふねどもいせの看板或ひは又疑らうと云まらるる

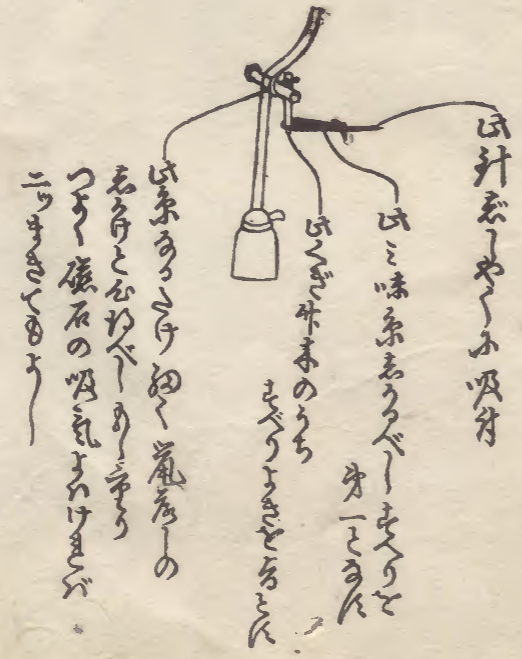
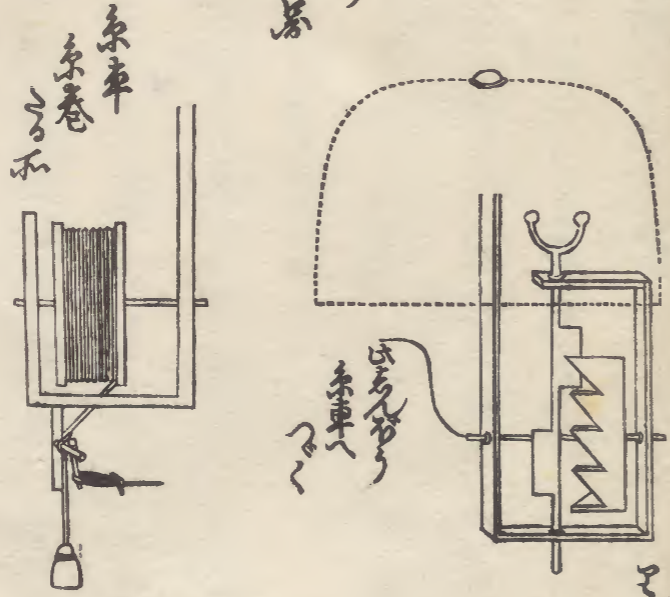
大名丸の目ふもぬぐべきまひまんと形入並しゆ殊と吸いねが共のふえ  
 定めて多くの年と獲てはく入るるの病らきくるを大まきなる拍毛  
 心と心よりいふまゝ秋のほつ時の大地震ありて後彼石ふ殊と吸いね  
 えのどく小付ふよりて大地震ありて前ふの磁石殊と吸いねとぬぐ  
 せしものゆゑのよし是小付て或人の地震時半とらふめのを造らん  
 とく巻と解のまてあふまゝてゆゑと為

地震計 全圖



土んの中目さきへあてまきとあまらけ

車 分離 正面より 見る事



是等ゆゑに、積ふりか島を練、巨艦を法とやりり、若ふ似しことども若  
 二変と剣しるべ、成就せざるやあらん、お後の世のさふもの、と画師  
 重久のものと借りて、とてとまはさるん







依此情の秘あり一有徳のものの何ぞ持て其の徳本居り  
大性一つ知と要一夫徳と成り其苦徳百倍ゆへて是れ九を要し徳とも  
心中精初ま一其苦徳の災害をけりて之の後世の徳ふと  
△河内赤野村大徳と流しと母と限る日本地を延物一うけちち地居ふて長  
三万といふ方も製する其五人と徳也初らうらむ其ちち郭の火と田丁の  
歩むのど一其徳ゆへせんとも赤野一人の世とあり一其徳と止て云我  
相のつれ合ます所の金百両をせむと云ふは男かたを云と格退謝し故物一  
多も一其徳より紙布と云物一令と探居る仕立と云ふ悪心をあつ紙布と云  
たつる紙布をせむと云ふは赤野天帝秋の鳥見ゆきと云ふと右曲老い十月九日  
右捕る景初物多の百両と云ふは後の災いありと云ふ一若くはの難と云ふ  
其徳を老と云ふと云ふ紙一紙は後の報と云ふは正と云ふ善徳と云ふ  
百両と云ふは何と云ふは鳴呼と云ふは赤野村の徳と云ふと云ふ

